新名神高速道路・東海環状自動車道建設事業に伴う

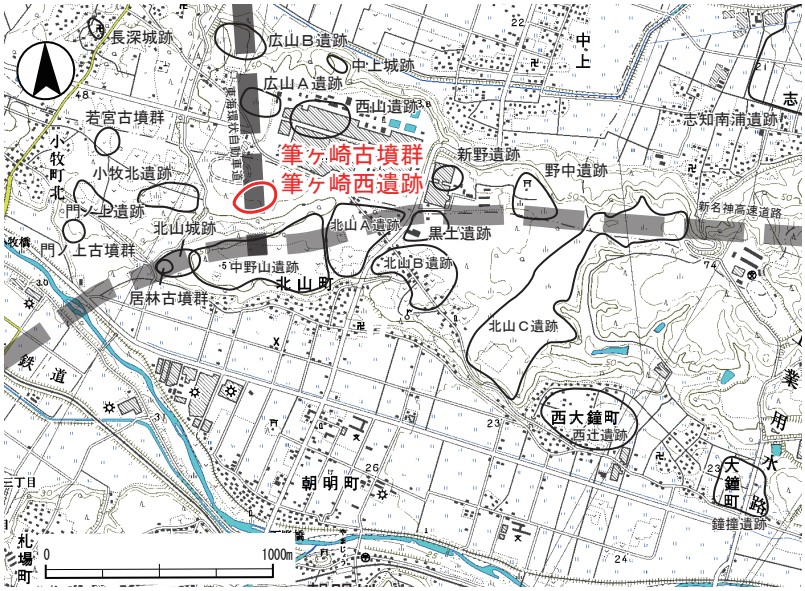
筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡
第５・６・７次発掘調査現地説明会資料

上空からみた筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡

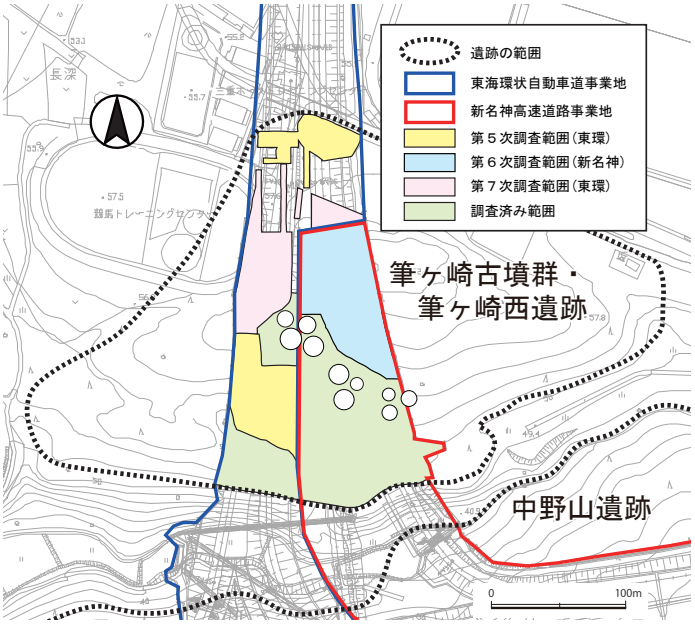
― はじめに ―

筆ヶ崎（ふでがさき）古墳群・筆ヶ崎西遺跡は、朝明川と員弁川にはさまれた丘陵にあります。古墳群は10基からなり、古墳時代後期から飛鳥時代（今から約1,400年前）につくられました。

筆ヶ崎西遺跡は、飛鳥時代から奈良時代（今から約1,300年前）の集落です。同じ時代の集落として、中野山遺跡や北山Ａ遺跡などが近くにあります。



遺跡の位置



筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の範囲

１号墳から出土した耳環（右：横幅 2.3cm）

煮炊き用の土師器　長胴甕（ちょうどうがめ）と呼ばれる炊飯具です。

― これまでの調査 ―

古墳 10 基の調査では、須恵器・土師器のほか、耳環（じかん）７個などが出土しました。珍しいものとして、６号墳から釵子（さいし）（かんざし）が出土しました。

集落の調査では、竪穴住居 53 棟、掘立柱建物 26 棟などが確認されています。特に鍛冶炉（かじろ）が見つかったことは大きな意義を持ちます。

出土品として土師器・須恵器のほか、漆が付着した須恵器杯、製塩土器、鉄製品・砥石・鉄滓（てっさい）（鉄を加工した時にできる残りかす）などが確認されています。

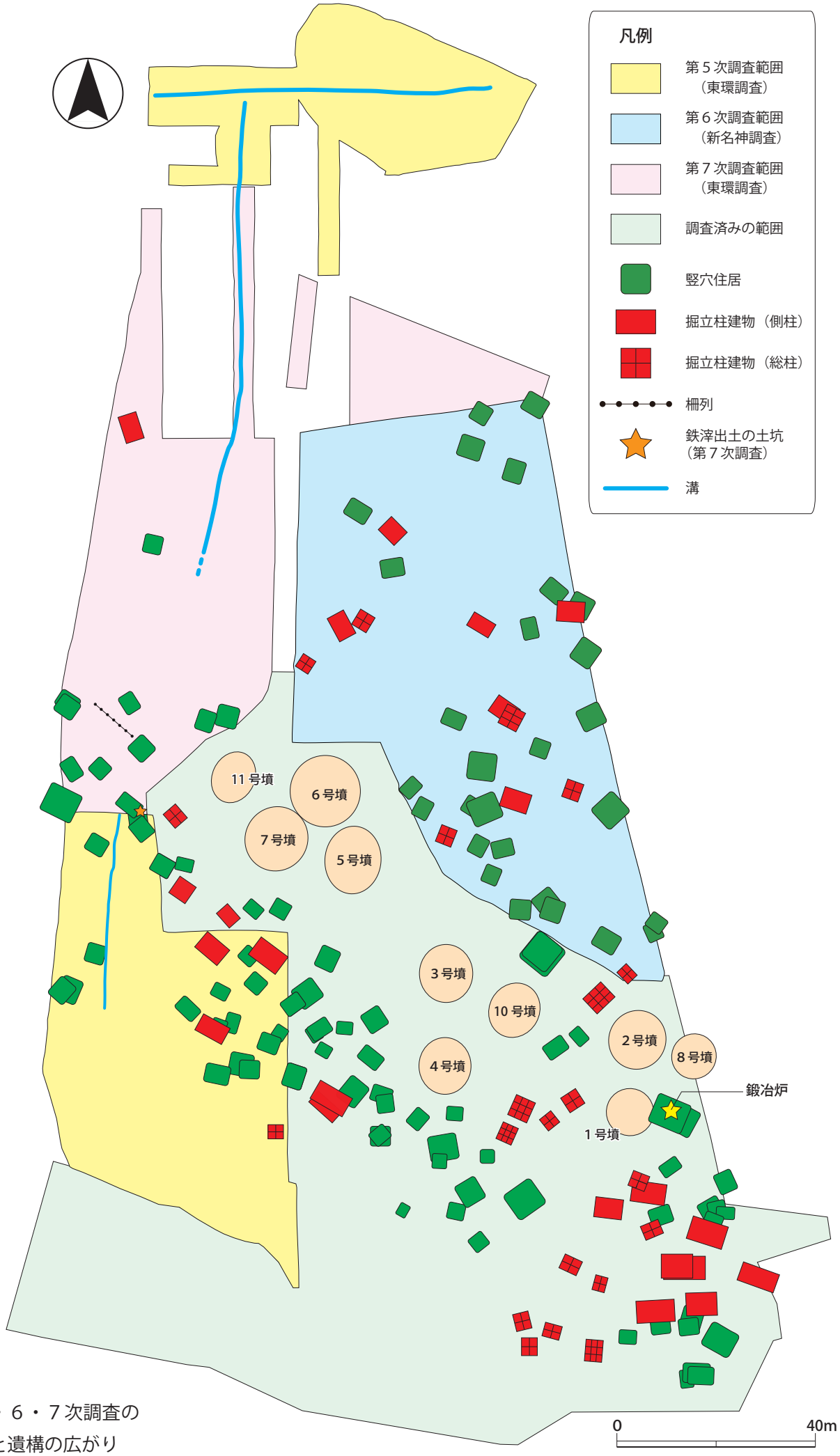
これらの品から、集落の時代は飛鳥時代から奈良時代と考えられます。

― 今年度の調査 ―

筆ヶ崎西遺跡では３回に分けて調査を行い、竪穴住居 54 棟、掘立柱建物 17 棟などを確認しました。竪穴住居のほとんどが四角形の平面形で、カマドがあります。また、一辺４ｍほどの小規模なものもあります。

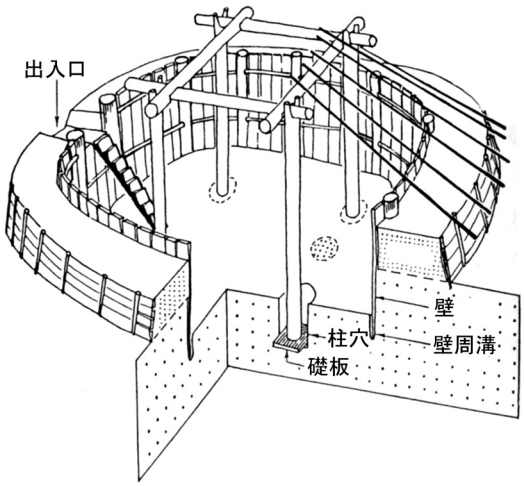
掘立柱建物は、住まいとして使われた建物（側柱（がわばしら）建物）と倉庫として使われた建物（総柱（そうばしら）建物）があります。総柱建物は、重量物に耐えられるように建物の内側に床を支える柱を据えています。

須恵器

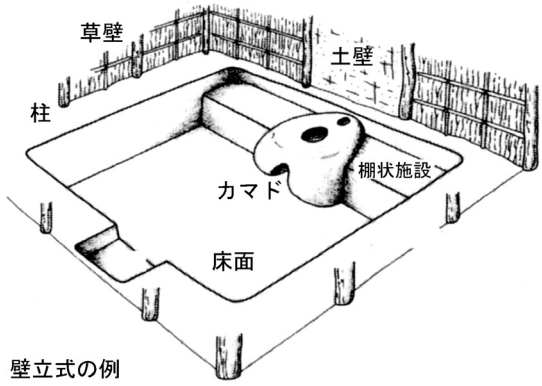


第５・６・７次調査の
範囲と遺構の広がり

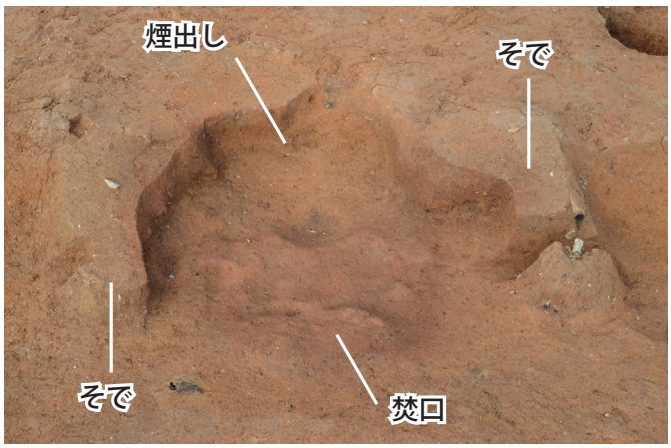
竪穴住居　四角形で、壁ぎわに溝がめぐります。カマドは壁に接して作られます。



竪穴住居の内側　文化庁監修『発掘調査のてびき』2010 年より引用



カマドの模式図（壁立式の場合）　文化庁監修『発掘調査のてびき』2010 年より引用

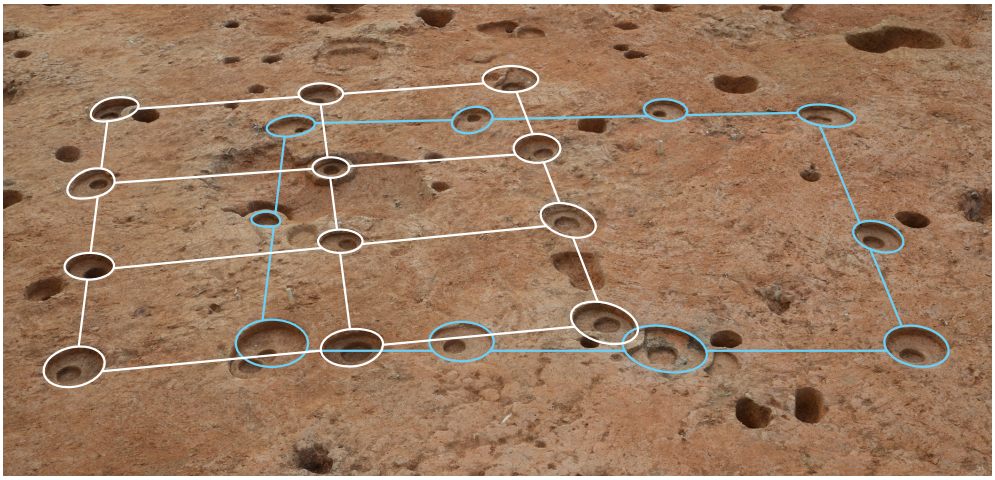


カマドの発掘　　カマドの下半だけが残っている状態です。煙出しは、壁から突き出るように伸びています。

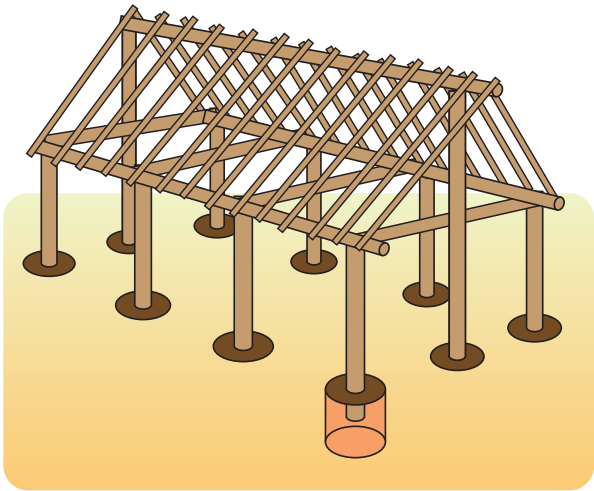
出土品としては、須恵器、煮炊きに使われた土師器の甕（かめ）のほか、鉄滓、フイゴの羽口（はぐち）、砥石、黒色土器 1 点、須恵質の錘（おもり）2 点、知多式製塩土器 3 点、平安時代の須恵器 1 点が確認されています。今年度の調査でも、建物、出土品のほとんどが飛鳥時代から奈良時代のものでした。

貯蔵穴　竪穴住居のカマドの近くで見つかることが多く、しばしば土器が出土します。

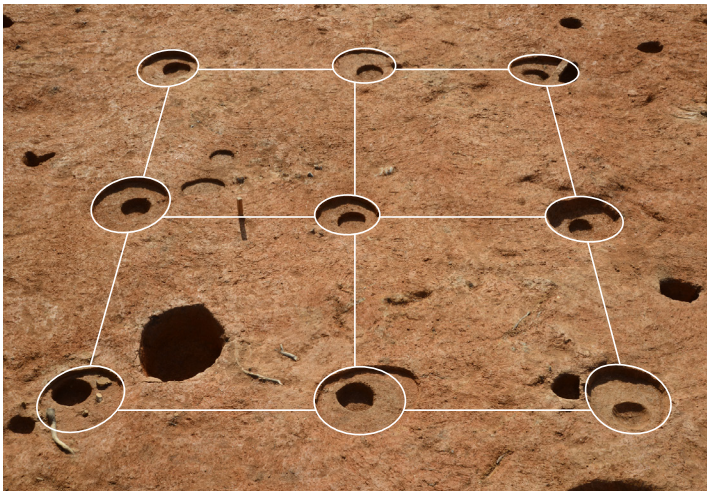
錘（おもり）　魚をとる時に網に取り付けて使うおもりです。筆ヶ崎西遺跡の出土品は須恵質です。近くの須恵器窯で焼かれて、この集落にもたらされたのでしょう。



２つの掘立柱建物　３×２間の側柱建物（青線）と３×２間の総柱建物（白線）が重なり合っています。柱穴の重なり具合から青線のほうが古く、白線が新しいことがわかります。



掘立柱建物（側柱建物）の模式図



掘立柱建物（総柱建物）　総柱建物は倉庫のようなもので、重量物に耐えられる構造になっています。いったい何を入れていたのでしょうか？

鉄滓の出土状況　指さしているところに鉄滓（鉄を加工した時にできる残りかす)があります。筆ヶ崎西遺跡で鉄素材を製品に加工していたことを示す重要な証拠です。

尖頭器（せんとうき）　縄文時代早期（今から１万年前）の石器です。先端が欠けて失われていますが、本来は尖っていたと考えられます。筆ヶ崎西遺跡では縄文時代の集落は確認されていませんが、当時のものがわずかに出土しています。

― 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の発掘調査から分かること ―

1．飛鳥時代から奈良時代の大規模な集落です

平成 23 年度～ 25 年度の調査で、古墳 10 基、竪穴住居 107 棟、掘立柱建物 43 棟（うち総柱建物 21 棟）が見つかりました。集落の建物跡は飛鳥時代から奈良時代のものと考えられます。となりムラの中野山遺跡などとともに大規模な集落だったと考えられます。

2．集落では鉄素材をもとに製品へと加工していたことが分かりました

鍛冶炉・フイゴの羽口・鉄滓・砥石の出土から、鉄素材をもとに、農具・工具などを作る鍛冶の技術を持つ人の居住が確認できました。鉄滓の量は豊富で、いくつもの地点から出土しています。この集落だけで使うには多いといえます。さらに出土した大型の釘は、郡衙（ぐんが）・寺院において扉などの重厚な建物に必要とされるものです。これらの点から、筆ヶ崎西遺跡の鉄製品は郡衙・寺院・近隣のムラなどに広く供給されたと推測されます。

周辺の遺跡でも鍛冶に関わるものが出土していますので、この地一帯が鉄器加工の一大拠点だったと考えられます。

このように筆ヶ崎西遺跡の発掘調査によって、古代の人々のくらしや、ムラとムラの結びつきなどが色鮮やかによみがえるのです。

鍛冶炉　この集落で鉄器を加工していたことがわかる貴重な証拠となります。写真の台の長辺 75cm。

大型の釘　郡衙や寺院において扉などの重厚な建物に必要とされるものです。長さ 23cm。

鉄滓　この集落で鉄器を加工していたことがわかる貴重な証拠となります。

筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡第５・６・７次発掘調査現地説明会資料
（新名神高速道路発掘調査ニュース「新あさけのいにしへ No.19）
三重県埋蔵文化財センター　〒 515 － 0325　三重県多気郡明和町竹川 503
TEL：0596 － 52 － 1732 ／ FAX：0596 － 52 － 7035　http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/maibun/
四日市整理所　〒 512 － 8064　三重県四日市市伊坂町 126 － 1
TEL：059 － 363 － 3195 ／ FAX：059 － 363 － 3196
2014 年 1 月 18 日